

新学年を迎えて

校長 新津 真澄

私たちは、四月三日新学期を始業し、開校七八年の学校歴史を繰々ことになりました。去る三月八日昭和五二年度卒業式を挙げて、全日制三六六名、定時制三二名、計三九七名の卒業生を送り出し、続いて四月四日、全日制三六六名、定時制一八名の新入生を迎え入れました。過年度は、事故も無く上田高校本来の充実した教育活動が出来ましたことは、同窓の皆さんの御援助の賜と感謝しているところです。お陰様で、一学期末には待望の普通教室棟と第二グラウンドが竣工し、夫々生徒達の学習やクラブ活動の場が拡充されました。生徒達は、古色蒼然たる校舎と対比して、校友会誌「松籟」二五号に、「新旧交代期」、「アンパランスのバランス」、「自称文化財のあわれな最期」等々古きをなつかしみ、新しきを期待する複雑な表情を示しております。また、新校舎北側の空地に、自転車置き場二棟と周辺の舗装および自家用水の浄化装置等の工事が完成し、市役所から見た上田高校の景観は一変しました。県教委は、五三年度に改築継続のための調査費を計上して、測量、ボーリング等の基本調査のうえ新校舎の全設計図を仕上げ上げるほか、旧施設の臨時的補修をする予定です。なお、学校は同窓会、PTAとともに校門、土塀の改修及び堀の浚渫について、市

創立八十年を迎える

理事長 柳沢 文秋

長野県長野中学支校から独立して、長野県上田中学校が創立されたのは明治三十三年（一九〇〇）四月一日である。従って上田高等学友校は昭和五十五年で創立八十年を迎えることとなる。また同窓会が創立されたのは大正十五年であるから、昭和五十五年に創立五十年を迎えることになる。八十年の祝賀会の次は百周年祝賀会となるが、この時には上田中学卒業生三十回期生までの大部分の方々は幽明所を異にして居られるであろう。従って八十周年祝賀会は盛大に心おきなく行わねばならぬ。

八十周年の記念事業には第一に同窓会館の改修を是非共に行いたい。六十周年の記念に建設した建物も二十年を経て、屋根等修繕の必要がある。第二には十年毎に発行している名簿の発行である。従ってこの二年間住所、勤務先等の変更があった場合は必ず同窓会宛へ御連絡下さい。第三には上田高等学校

依田窪上中会発足

昨年秋から練り上げ、一月二十日次のような案内状を出した。

「依田窪地区上田中学校卒業生各位 上中会ご案内
皆様にはますます御健勝のこととお慶び申し上げます。さて最近地区内にて上中時代をなつかし

み、語り合ひの機会を持ちたいとの声に答えて、その会合を計画しました。万障お差しくり奮ってご出席下さい。一応上中時代(46回)の卒業生にして地区内に居住又は勤務する者を対照にしました。

二一回生入学六十年記念会

いわねばなるまい。

二一回生の集まりは在関東と在郷のグループでそれぞれ行われており五十二年には、上田で在郷の「二一会」を開いたばかりだったが、横浜の松平忠久兄や川崎の若林泰三兄からの連絡もあり在関東の「大士会」と五、六年振りに合同して十一月十日、十一日、戸倉温泉ホテル白鳥園で、入学六十周年を記念して相会し、旧交を温めることになった。参加者は二十一名で、通知者の半数であった。

平均年齢七三・四才で、頭は光白、半白が十数名、黒は三、四名で貫録は十二分。弁護士、社長、団体幹部、医者、塾長等々、現役の猛者が多く頗る元氣である。卒業当時は一〇名程だったが、その四割は故人となっているので、ここへ出て来られたということは何といっても幸福な人々であると

雪になったが、会場丸子橋畔「かたぎり」には三々五々参集し、申込を越え四十二名となり、工藤世話人の司会で、座長に松山篤(25)をおし、丸山世話人より設立経過を報告し、自己紹介などをし、当店主片桐孝(35)の特別配慮で美酒肴の祝宴に入った。乾盃の音頭は滝沢藤一郎(18)、旧談快談校歌、応援歌、凱歌と若き日に戻って時の移りを忘れ、牧島章吾(23)の万才の音頭で一応開会にした。当日の決定は年一回開催のこと、今日の会は五十二年分とし、五十三年度にもう一度九月頃開催。当日の出席者、牧島章吾、丸山

重義、滝沢篤、工藤林之助、工藤芳夫、小林次男、中村邦三郎、工藤千幹、依田嘉人、岡島亮、片桐孝、小林建男、小泉正衛、山浦澄男、酒井寛雄、吉村武雄、下村昭次、小林敏男、船渡善四郎、成沢武夫、松山篤、横山忠夫、堀内孝之、中村進、望月精一、春原芳久、吉池賢三、田村武、藤森芳房、辰野恒雄、寺沢嘉和、滝沢藤一郎、金子憲行、山本千春、大平秋男、宮下好功、金沢和夫、大沢芳夫、大沢馨、石合一期、以上四十二名

この他滝沢愛、白倉高、金井勝、水井泰美の四氏より御祝儀を頂いた。(工藤林之助記)

すもの、懐旧談にふけるもの、政治、経済、さては世界状況論ずるなどで眠るのが惜しいという様子。翌朝、食事のあと期せずして陣をくみ次回の計画を協議したが一泊では何とも慌しいので次回は二泊とし、故郷で親光をしながら交遊を楽しみたいという希望が多く地元が引受けることになった。出席者は次の通り、

最後に二一回生と母校の発展を祈念して松平兄の音頭で万歳三唱があり、お開きとなった。

最後に二一回生と母校の発展を祈念して松平兄の音頭で万歳三唱があり、お開きとなった。

出席者は次の通り、
関東 小山礼吉、近藤貞、島田次郎、滝沢勝人、土屋蓮、長谷川長兵衛、松平忠久、若林泰三。
在郷 小笠原利司、工藤友太郎、栗林英雄、清水正邦、関亨、橋詰英雄、原田久雄、宮城博、宮下寅雄、山浦厚、山口定次郎、柳沢恰、横沢要。

<p>名会社 三井 酒店</p> <p>社長 三井 祐三(29回) 専務取締役 三井 貞昭(57回)</p> <p>上田市中央6-14-5 電話(22) 0245</p>	<p>ナショナル住宅設備機器専門店 セントラル冷房暖房給湯設備工器具 総合燃料・燃焼</p> <p>株式会社 千野 商店</p> <p>専務取締役 千野 完吾(44・5年)</p> <p>上田市中央6-15-8 電話上田②0737 ②0723 ②3133</p>
--	--

二一五期会の記

二十五期会は大正十五年の卒業で丁度昭和の年号と同じ、昭和五十年に別所温泉花屋ホテルにおいて卒業五十周年を期して盛大に行はれた。その際五十周年は来年度と言ふ意見が出て、明年は東京で主催して盛大にやろう、否もう歳だから毎年開くことにしようと言ふようなことで、昨年の軽井沢に続いて本年六月五日地元保坂の設備で千曲川畔の戸倉パークホテルで開催された。

午後三時頃からの受付、時間になると待つ間も無くボツボツ集つて来る。見たことも無い人なので別のお客様かと思えば誰某と名乗られ、ヤアヤアとたちまち上中健児の昔に返える。かくして集る者三〇名、昨年より僅に少いが同期生一五五名中生存者八四名、出席率にして約四〇名、中には寝た切りと言ふ気の毒な人もあるから先は盛會と言へる。それよりも卒業以来始めてと言ふ人もあり、回を重ねる毎に新顔が加はることは楽しい。

受付で寄せ書きを終えた人々はロビーで或は客室で三々五々おもしろい／＼に駄へる人、入浴する人、様々であるが、今回宮島幹事の骨折による返信に寄せられた原文を集録したコピーが受付で手渡され、それにより欠席者の誰彼もよく話題にされ、懐旧談に花が咲いた。時間が来てまだ一人二人の遅参もあるが、ゆかたにくつろぎ広間

で記念撮影の後、地元で専ら設営に骨折られた保坂のあいさつに続いて自己紹介と型通りに会は進められた。松山が出席したら叙勲のお祝いをと待ったが、たゞ「当日は上田で同窓会総会の祝賀会と重なって残念ながらその機を失った。」

られて、当時、本日が今斯くも変わったかと、今更ながら時の流を感じさせられた。

自己紹介は座の乱れないうちに言うことで酒はお預けて始つたが、あと数人と云う所で隣の会場からホテルのサービスの台湾人のバンドが始つて終りの方は聞き取れなかった。愈々宴会となり、台湾人のバンドもこちらの会場に移つて演奏が始つた。永年台湾で教育に携つて来られた丸山が何やら台湾語でリクエストして一段とバンド演奏も盛り上り、同時にそこ、に車座になつての話の花も賑かになつた。話の種は尽きないが、戦後アメリカによる教育改革を真剣に取組んだ仲間の意見にはお互に共感が持たれた。

翌日は酒のある朝食にまた話がはずみ、隠業も出て名残は尽きないが、中には小学校の同級会で今消す校長室の前で記念撮影をした後、マイクロボスにて「いづみや」に向つた。

我々三六会も卒業以来、早くも四十年が立ち、今回は一泊で周會をしようということになり、昨年六月十一日に鹿教湯温泉「いずみや」(會員斎藤博邦君経営)にて開催された。

一同は第一期改築工事の終つた母校に集合し外山教頭から現況についての説明があつた後、大部分の人達が卒業以来初めての母校訪問なので、雨天体操場、講堂、南側の旧校舎など昔懐かしい場所に立ち感無量のようであつた。近く姿

夜は白鳥園で居続けたと言ふ者もあり、再會を約して、西に東に袂を分つて掃路についた。

当日の出席者次の通り
日下部忍 高原秀雄 保坂富男
宮堀俊雄 桜井岩治 星野一郎
荒井重雄 中曾根保雄 倉島孝一
新井勇 後藤政一 轟憲二
三井忠直 高野禎吉 宮下忠雄
中沢勝三郎 高島兵庫 宮入博
馬場長市 尾崎一雄 小手正義
有賀正一 島田佐人 萩野喜次
杉野順次郎 金沢勇 近藤英雄
宮島武雄 丸山重義 井沢喜三 (井沢記)

全会員に趣意書を送り募金の協力と呼びかけたところ、予定を遙かに上まわる寄付金が集まり、今更三六会の愛校心と団結の強さを感じ心温まる思いがした。

地元の会員にて相談の結果、ピアノの他に足踏オルガン六台を追加贈することになり、九月十七日午後一時より校長室にて贈呈式を行い、地元の高山、半田、矢ヶ崎、片岡、高山、丸山(正)、山口)折井の八名が列席し、会長より新津眞澄校長に目録を手渡した。

続いて音楽室にて寄贈ピアノの披露演奏会が行われ、音楽担任の永井彰先生の解説で、男女の生徒による数曲の弾き初めがあり、我々の贈つたピアノでかななる調べに耳を傾け感激を新たにした。当夜は「うな藤」にて地元会員有志によるささやかな祝賀の宴が開かれ、外山教頭、永井先生、水野PTA会長も列席下され、一同

二一六期生・菱野大会

今日の信毎紙に上田高校の校門の写真が載つている。そして「県下ナンバー」と記してある。やはり堂々たる姿であり、なつかしい門である。説明をよむと、校門としては県内で最古。上田藩主居館表門寛政二年再建(一七九〇年)と記してある。何としてもこの校門の残されていることは幸である。

さて昭和二年三月、この校門を築立つた二一六期生の同級会は年和氣萬々の楽しい会合であつた。我々三六会も還暦を目前に近づけてみると在学時代、「小泉ガチャン」「池田ゴセン」「ムコサン」「横沢インキョ」などのあだ名で懐しい先生方の当時の年令より我々の方が上になつたのだと思つと、いままら時の流れの早さを感じ、隔世の感に堪えない思いである。

我々三六会も支那事変の勃発し昭和十二年に卒業、続いて太平洋戦争に突入、戦局の最も苛烈な時代に青春を送り、卒業当時百五十五名の会中三十一名を戦争で失ひ、病死の会員を含め五十二名の友を失つたことは痛惜にたえない。毎年の総会に皆が元氣な顔を見せて、十年後も全員が健在にて、また何か母校に役立つことが出来たらと心から念ずる次第である。(折井正彦記)

海抜一〇〇メートル、万緑の山氣清澄の高台、郭公鳴き湯山は夏の鶯冷ゆる(邦人)小山君がわがあゆみと題するあいさつ。次に故宮崎久登君の報告を滝沢信君と倉沢周平君よりあり、故小林正平君の報告を馬場義人君よりあり、一同謹んで黙禱す。わが同期生は死亡五六名、現在九五名いる。次にアトラクションとして、小室馬子唄と嗚呼小諸城址の舞踊あり、更に小諸観光協会の長原君が朗々と馬子唄を披露して大拍手。記念撮影後宴に入る。山しづかないで湯の宴は、いつ迄も続く。やがてあらかじめ設定しておいた二次会室に再び皆でとぐろを巻いて語りあかす。特にこの室での圧巻な恩師総謝恩談である。即ち恩師についての記憶発表会である。これは田口君の進行妙を得て、三十名にわたる恩師が列挙されてなつかしき限りなし。

つて宿の外を散策、朝食の席で来年度の開催地を青木村の田沢温泉とし、当番は川西同志会と決定。なお、長尾君の撮つた母校の思出の校舎四十枚の写真を展示し、いづれアルバムにして頒つ事とす。宿の車で高峰高原探訪。れんげつつじ美し。高原に老蒼遠く鳴きいたり(論一)。高峰から信濃国を一望して下山。あと、小諸の小山敬三美術館を見学して散會。

そもそもこの同級会が例年過半数を越す参加の盛況は、勿論同級生の平常の心がけがよく、友情が極めて厚く、常に連絡を密にし、情報活動の活発にもよる。会の前「近況だより」を配布。さらに会の後は「会の模様を詳細に知らせる」後記を全員に配布して、会への関心を深める。又、時々同級会情報を流す。又、死亡者ある時は、会本部より弔電を捧げ、且近くの級友が弔問する。又、新年には全員に本部より賀状が発送されている。

出席者の氏名
酒井論一、工藤三、石井公男、滝沢 伝、坂田隆雄、田口喜一郎、馬場 武、本堂知道、松岡 茂、横山 嵩、森田達男、市村志真衛、水科 和、福井清作、馬場義人、宮本嘉嘉、倉沢周平、小未曾速水、佐藤弘一、山崎通雄、山崎晉衛、竹内丈夫、柴崎章雄、長尾秀次、高原英二、南沢忠雄、伴野徳人、大塚忠雄、若林益夫、萩原 雅、小山達男、今井利貞、小池 就、佐藤真一、小林邦人、大井直二郎 (26期、長尾 秀次記)

三六回の卒業四十周年記念
ピアノとオルガンを寄贈

上田高校同窓会

関東支部の現況報告

(その5)

本紙の前号第十一号には、昭和五十一年四月までの関東支部現況を報告したので、その五月以降を主なる項にまとめて御報告申し上げます。

昭和五十一年度報告事項

五月三十日、同窓会のふるさと上田本部大会に、本会を代表して(28坂井支部長外役員数名出席、本部との親睦交歓につくす。六月三日、幹事会開催。来る二十八日の第十五回関東支部大会についての諸案を議す。六月五日、会報「うえだ」第十五号発行、支部大会通知もかわる。六月二十一日、長野県高校同窓会東京連合会に坂井支部長外数名出席、僚友校代表各位との親交につくす。三十有餘校出席せり。六月二十四日、幹事会開催、四月後の大会に詳細最終打合せ。六月二十八日、第十五回関東支部大会開催、六文銭の鉢巻に青春の血潮澁り、本大会益々盛況なり。八月二十五日、長野県高校同窓会連、「東信地区理事會」矢島出席。九月三日、東信地区同窓連帯責任申会開催、十九校中十三校出席。本会より矢島出席、規約討議。九月七日、幹事会開催、第十五回支部大会の反省会とする。九月十六日より十月の間、数回編集委員会開き、会報第十六号の発行を議す。全委員の勞に多謝。

十一月五日、待望苦心の会報第十六号発行す。益々充実の感深し。十一月十六日、幹事会開催。出席者四十八名各期幹事の意見活発。昭和五十二年報告事項。二月二十二日、恒例の「幹事会兼新年宴会」開催、出席六十名余。かねて募集中の「関東支部の歌」入選発表等あり、幹事親睦大。三月十六日、長野県高校同窓連の常任理事会あり、総会計画議す。四月十二日、理事会開催。第十六回関東支部大会について計る。大会委員長に(35)花岡副支部長と定り、39期48期幹事役員と決す。四月十九日、東信地区同窓連帯

任理事會開催され、四月二十六日総会開催、僚友校との親交増大。五月十三日より編集會議開始。六月五日、第十七号発行す。母校教職員及在校生に贈呈す。六月五日、本部同窓大会に本会役員幹事出席不叶、会報のみ贈呈。六月二十一日、長野県高校同窓連總會開催され、各校五名出席。本会より坂井支部長外役員出席す。三十有餘校出席。交歓につくす。六月二十八日、第十六回関東支部大会開催。母校の新津新校長先生始め恩師各位、外、来賓多数を迎え、盛大に無事終了。感激や大。九月二十六日、東信地区高窓連帯事會開催。九月二十七日、幹事会開催。第十六回関東支部大会についての反省会とし、益々の盛況なるを喜ぶ。十月二十日、東信地区高窓連帯

十月二十五日、島田、大森両相談役始め坂井支部長、外役員幹事を含め打合せ開催。明年役員改選の議及び諸案を討議す。十月三十一日より編集會議続行し、十一月十五日会報第十八号無事発行す。十一月二十四日、幹事会開催。役員改選の議につくし、本年終了。以上にて報告を終了。(文責・矢島)

札幌支部例会記

十何年振りという記録的な寒気と降雪のさなか、二月十二日午後六時から札幌の繁華街にある「屯田の館」(信州出身者経営)なる飲食店で追出しコンパ(上田高校出身の北大卒業生歓迎会)を開催した。

第三十三回卒三三三會報告

三三三會も十五回目となり、昨年九月二十四日菅平高原望岳荘(同期北村春雄君経営)で開催しました。前回と同様母校を參觀ということで午後一時上田高校正門前に集合。新旧交りゆく校舎の姿をじっくりと見廻つて午後二時、マイクロバス二台に分乗。約一時間で菅平に到着、宴會の膳列三十三名、お招きした松田・野明両先生のご挨拶「人生は死ぬまで勉強」と選擧を経た會員一同を吹きとばす勢いがありました。柳沢理一郎君から母校・同窓会の近況報告あり、統発、詩吟、隠し芸、はて

は北村家一族総出て菅平に残された数々の民謡や踊りを披露。正に「熱烈歓迎」でした。帰りに名産とうもろこし、レタスを土産にと華家接待の二厚意に感謝しました。泊る者十名、静寂の夜更けるまで語り、明けて秋色濃く高原をマイクログ案内で町営自然博物館、テラス山麓の新しい観光地、別荘開発地など視察できて幸甚でした。三三三會は努めて旧師の消息を追ってきました。ご健在の先生方とその近寄りを記しておきます。

○松岡重三郎先生(在職昭4・14) 短歌集、孤雲・石のぬくみ二冊 渋川市本町二四一三 ○十亀豊一郎先生(昭8・25)

第三次産業革命(松山商大) 松山市中町二二三四 ○松田仁兵衛先生(昭6・11) 社会福祉とともに 佐倉市井野一〇八九一六三

今日、始めて御出席戴いた榎本先生始め、諸先生方の御元氣な御姿に接し、昔に変わらぬ講義調のお話に耳を傾け、30有餘年のタイムトンネルをくりぬけて、あの腕白ではあつたが、感慨に満ちた、古き良き時代に、しばし、立ち戻つたものである。

このコンパは支部発足以前からも北大に関係ある同窓有志で行っていたが、支部結成(本誌小山昭一氏報告済)と同時に多小斐則的の嫌いはあつたが社会人同志のご理解とご協力を頼つて支部行事として毎年つづけられている。今夕のご出席者は大先輩の山浦隆次郎氏(17自動車学園経営)を始め勝野貞哉(42北大助教教授)桜井武(警察署長)池田孝三(44医師)小山昭一(51北大助教教授)平尾三郎(51札幌大学教授)田中健二(58弁護士)若林信夫(57小樽商大助教)の諸氏と北大学生十四名と宮坂幸男(32会社経営)の二十四名だった。

先賢諸氏の貴重な体験談、人生訓を拝聴しつ、卒業後の希望と抱負を語る学生諸君は文字通り頼もしい限りであつた。

この期のは、戦雲酣、敗戦色の濃くなった昭和19年の入学の際、懐しく、それ故か物の見方、考え方に多くの共通点、共鳴点を見出すことのできる言わば心のオアシスとも云うべき聲の集りである。隔年毎に開催されるが、回を追う毎に、出席者が増え続けているのは地元の伊藤伝兵衛君の奉仕による所が大きい、同時に入学時二百五〇名であったものが、戦災を避けて疎開してきたものが合流して三百五〇名位にふくれ上つたことから、総人員の多かつたことにも起因する。

有志による第16回ゴルフコンペを「信濃の国」でしめく、つて或はまっすく家路へ、或は二次会に三三五粉雪まう夜の街へと散つていったのは夜も更けて十時であつた。(一九七八年三月三日宮坂記)

第四十八回期生の動向

去る52年9月17日、第7回48会総会を母校同窓会館に於いて、11名の恩師を迎へ同窓生八十四名の出席のもとに盛大に開催された。御出席戴いた恩師、依田誠先生、竹内敬太郎先生、北沢広行先生、北沢守先生、榎本一郎先生、齊藤嘉郎先生、高柳厚先生、若林和正先生、中村六男先生、山極真平先生、金子憲行先生。

この期のは、戦雲酣、敗戦色の濃くなった昭和19年の入学の際、懐しく、それ故か物の見方、考え方に多くの共通点、共鳴点を見出すことのできる言わば心のオアシスとも云うべき聲の集りである。隔年毎に開催されるが、回を追う毎に、出席者が増え続けているのは地元の伊藤伝兵衛君の奉仕による所が大きい、同時に入学時二百五〇名であったものが、戦災を避けて疎開してきたものが合流して三百五〇名位にふくれ上つたことから、総人員の多かつたことにも起因する。

有志による第16回ゴルフコンペを「信濃の国」でしめく、つて或はまっすく家路へ、或は二次会に三三五粉雪まう夜の街へと散つていったのは夜も更けて十時であつた。(一九七八年三月三日宮坂記)